



会報 2021年6月号

日本ニュージーランド協会（関西）
New Zealand Society of Japan, Kansai

創立1970年11月11日

The heads have Turned into one color End of hydrangea.

(Kobayashi I.)

新型コロナウイルス禍で何かと不安で不自由な生活を送っておられるのではないのでしょうか。今年度の総会は、書類審議となり懇親会も開催することができませんでした。当協会の例会も当分の間実施の目途が立ちませんが、昨年延期した創立50周年記念行事が年度内に開催できることを願っております。オリンピック・パラリンピックの開催も危ういようです。日本のみならず世界中のワクチン接種が進展すれば、落ち着いた世の中が戻るとは思いますが、政治・経済などに不安定な要素が多いのが心配です。新型コロナウイルス感染の一日も早い終息と皆様のご健康と安全をお祈りいたします。



Mission Estate, Napier (松沼清司)

日本ニュージーランド協会（関西）

〒558-0004 大阪市住吉区长居東2-17-28, 407

(石井気付)

電話・F a x : 06-6607-2112

<http://nzsocietykansai.com> E-mail:nzsjk@yahoo.co.jp

■ 2021年度会員総会ご報告

新型コロナウイルス禍の影響により通常形式の総会が開けなく、書面審議方式を採用。

会員には、資料一式を会報3月号に同封して郵送し、議案1から4の賛否を葉書にて返信依頼した。会員60名の内、客員会員13名を除き47名が対象で5月8日の締め切りまでに29名から賛同を得た。反対者はゼロで可決。葉書のオリジナルは5月11日、山下明事務局次長に事務局で確認を得た。後日、中村・山下誠二監事と林事務局局長が葉書の内容を確認。理事には葉書をスキャンして送付。コロナウイルス禍が終息後には例会開催を望む声が多数寄せられました。

■ 大地震から10年経って、振り返る

10年前の2月22日、NZクライストチャーチで大地震があり、大聖堂を含む建物の崩壊と共に留学中の多くの日本人も亡くなったことは大きく報じられ、急遽NZ協会も義援金を集める街頭募金活動を始めていました。そのすぐ後でした、東北地方太平洋沖で大地震が生じたのです。当日3月11日は、午後4時から東京駅八重洲地下の会議室で包装学会誌の編集会議が予定されていたので、昼前には東京駅に着いていました。当時、恒例にしていたのですが、偶の上京に際して、東京で学生（大学院に進んだので、約10年）生活を送っている息子に会うべく、本郷にある文部科学省共済会館（国立大学教員だった関係で、上京時にはよく利用する）のレストランで一緒に食事しました。会食して1時すぎに別れた後、暇つぶしに近くにある東大の学食（法文2号館地下、银杏メトロ食堂）で、無料のお茶を飲みつつ持参していた本で読書（多分、塩野七生さんの”ローマ人の物語”シリーズ）タイムとしていました。約1時間半は過ごしたでしょうか、突然、大きな横揺れに襲われました。時間的に結構長かったし、船が揺

れているような、ゆっくりした長周期の揺れだったので、強い大地震が比較的速くで起こったと判断しました（阪神・淡路大震災では震源が近いので、激しく短周期の強い揺れ）。当時食堂に居た人は少なかったのですが、次第にぽつぽつと、誰に言われるでもなく自主的に退去するので、私も半地下にある食堂から地上（安田講堂の右手手前になる）に出ました。携帯電話で地震情報を得ようとする人もいて、私は大阪の自宅が心配になり、電話したところ、大阪は揺れたが大丈夫との返事でした（地震直後、電話は通じた）。どこで大地震が起きたのかと訝っていると、外に出ていた人からは東北太平洋側との声が聞こえてきます。もちろんこの間も余震が続き、携帯に地震警報が入ったと叫ぶ人もいます。建物から大学構内の広い場所に出ている人が多いのですが、誰かのラジオでしょうか、大津波警報や津波高さの予想の音声も聞こえます。東大構内については、ある程度知っているもので、工学部4号館の前の広いエリアに、暫く居たでしょうか？その後、東京駅に向かうべく、とりあえず地下鉄本郷3丁目駅に向かいました。しかし、予想通りでしたが、駅構内には入れず、東京メトロは不通でした。それで、引き返しつつどうして東京駅に行こうかと思案しながら、本郷通りを歩いていると、偶々タクシーが止まり、降車されましたので、それを捕まえてタクシーに乗り込み東京駅に向かいました。ラッキーでした。この時点では山手線を含むJRも止まっており、タクシー以外の手段では徒歩だけだったのです。途中、ヘルメット姿で集団避難歩行されている団体や戸外に出られている多くの方を見ました。この時点では、道路の渋滞もなく、遠くで煙も見えました。運転者さんからは地面が揺れた話や、ガラス窓の落下なども聞き、東京駅に着くと、次にタクシーに乗るべく多くの人が殺到してきます。まず会議が予定されている地下室に向かいました、会議開始予定時刻4時の約15分前だったでしょう。元来約15名参加の会議なのですが、居られ

たのは編集委員長の斎藤先生（神戸大）だけだったでしょうか、その後もう一人か二人が少し遅れて、徒歩で来られたのですが、しばらく全員が会議室のテレビを見るだけです。津波のライブ画像には圧倒されます。参加者も少ないし、当然流会になりましたが、ある意味この惨状を記憶するべく5時頃まで会議室に居まして画像を見ていました、それから各人、これからどうしようとなりました。ホテルの予約を試みる方も居られたが、6時半頃発の新幹線予約してあったこともあり、東海道新幹線は大丈夫と考えて、私は駅改札に向かいました。ところが、新幹線は止まっており、ホームや階段で多くの人が座り込んでいます。当然改札も出入り自由で、一度外に出て、息子に電話して泊めて貰うことも考えました。ただ、駅員に聞くと、間引きで運転するらしいとのこと、それで、当然座席予約は消えるのだが、乗車券はあり、兎に角、乗って帰れば、遅くとも深夜には帰宅できると打算して、駅弁と飲み物は購入しておいて、6時過ぎホームで並ぶことにしました。これが正解でした。そのあと間引き運転するとの駅のアナウンスがあり、構内に居た多くの人がホームに押し寄せたのですが、早めにホームで並んでいた私は席に座ることができました。後から来た人が、私が座っている席に予約してあるから、どいて下さいと言われたのですが、間引き運転なので、グリーン席以外は全て自由席扱いにすると駅員の説明を繰り返して、席を譲りませんでした。非常時で間引き運転するのですから、この措置は公平だし当然です。超満員であり、かつアナウンスされた時刻より遅れた発車でしたが、7時前には動き出しました。ただ遅速だし、途中で何度も止まります。外を見ると道路は真っ赤で、道路が大渋滞していると想定されます。漸く、静岡辺りから次第に速度を上げて、新大阪着は当然12時超えですが、在来線、環状線は動いており、帰宅できました。

震災10年後の東日本大震災の復興状況について

ては、実態は別として、テレビや新聞でそれなりに我々も知るのですが、クライストチャーチのそれについては知らないなので、どなたか実地に行かれ、会誌上でご報告頂ければ有難いです。



(クライストチャーチ・新大聖堂)

(山内龍男)

■ 日本ラグビー・トップリーグ

(2020年～2021年)について

今年度のラグビー・トップリーグは、変則的な対戦方式、日程で行われました。毎年1月に行われるラグビー日本選手権決勝は、5月23日になり、トップリーグ16チームが2つのグループ(レッドカンファレンス・ホワイトカンファレンス)に分かれ、各上位3チームの6チームに他リーグのプレーオフで勝ち上がった2チームが加わり、8チームがトーナメント方式(勝ち上がり戦)で優勝チームを決めました。

決勝は、トップリーグの各カンファレンスでの1位チーム同士の対戦になりました。ボーデン・バレット(NZ代表)が注目された攻撃力のサントリーと、守備が強く攻撃もできるパナソニックの決勝は、31対26でパナソニックが先行逃げ切りの形で勝利しました。

この試合は、パナソニックの俊足ウィングバックの福岡堅樹選手(28歳)が、彼が目指す医師になるため、引退を決めて臨んだ最後の公式ゲームになりました。彼は、この試合でもトライを奪い、まだまだ活躍できる実力の中、医学の道に進むこととなります。彼は、今春から東京にある順

天堂大学の医学部に進み、練習と勉学を両立させていたと聞きます。ワールドカップ日本大会でも活躍し、7人制ラグビーでも五輪代表に選ばれていました。五輪が延期になり、引退を選びました。試合後の最後のインタビューは、晴れた表情で、「…全く悔いのないラグビー人生でした。新しい道に進むことができます…」と言いました。

サントリーのボーデン・バレット選手も、サントリーとの1年契約が終わり、NZのチームに移籍するようです。新しいラグビー環境でもきっと人々を魅了するはずです。決勝後のインタビューも彼らしいものでした。「今日は相手のサントリーが良いゲームをしました…。日本にいるたくさんの人々にラグビーの魅力を教えてくださいました。



(バレット選手)

今年度のトップリーグは、実力が接近し、ファンは楽しく観戦できました。NZ代表をはじめ、世界中から来日したプレイヤーたちは、ラグビーの技術・戦術・練習方法を伝えてくれただけでなく、確実に日本ラグビー全体の底上げをしました。

私は、3年前に他界した神戸製鋼の平尾誠二さんと少しですが面識がありました。「彼ら(外国から来たプレイヤーたち)のファイティングスピリットは凄いで。日本のプレイヤーは見習うべきだ」と言っていました。彼が日本代表の監督をしていた時には、日本ラグビーの将来を考え、代表に外国生まれのプレイヤーを積極的に起用し、キャプテンも指名しました。(当時の周囲の外圧は強かったと思います。)
「一番相応しい者がキャプテンをするべきだ。キャプテンをするのに日本人でなけ

ればならない理由なんか全くないと思うわ」と言っていました。また、彼に出会い、一番心に残っているのは、彼が仲間に対して(他人にも)本当に優しい人間だったことです。そのことを物語るエピソードはたくさんあります。言葉は時として正直過ぎるところがあり、頭の回転が速いので勘違いされることもあったようです。

神戸製鋼のブレディー・レタリック(オールブラックス)も日本を去ります。しかし、ベン・スミスの活躍は今後も観ることができます。NTTコムのTJ・ペレナラやクボタのライアン・クロッティーなどのNZ選手のプレイは楽しみです。優勝したパナソニックのロビー・ディーンズ監督や神戸製鋼のウェイン・スミス総監督もニュージーランダーです。

(貴志康弘)

■ コロナ禍の中でのワイカト大学の英語研修

私は1990年からニュージーランド、ワイカト大学の日本事務所で同大学に語学研修生を送る業務に関与しました。開始当時、英語研修生は全く居なかった中から現在に至るまでに一万数千人の語学留学生を送って来ました。(私は5,6年前から前線から退いています)

言うまでもないことですが、語学研修生が海外の大学を選ぶと、現地で語学研修に参加するまで様々な行程を経ます。ワイカト大学の場合、まず各大学でワイカト大学語学研修のプレゼンを実施します。研修参加を決めた学生たちはパスポートを取得し、渡航準備を整え、ホームステイ先を紹介する情報を受け取り、航空機で10時間を超えるフライトでオークランド空港に到着します。空港にはワイカト関連のスタッフが出迎え1時間半程度バスに乗り大学キャンパスに移動し、ホストファミリーと対面しホスト宅に向かい、その家庭で数週間から数か月の勉学生活をする事になります。英語の研修はワイカト大学のキャンパスでNZ

人（現地ではNZ人の事をキウイと呼ぶのは有名なことです）の教師陣の授業を受け、滞在中乗馬やジェットボート乗りなど各種のアクティビティを体験することもできます（多くの学生が参加します）。



（キャンパスにて）

上に長々と羅列したのは研修生が日本での生活から非日常の生活に入ることを確認したかったためです。即ち語学留学に於いては、日本語が通用しない環境で英語の研修をすると云うのがワイカト大学を含む一般的な海外留学の情景です。留学生は日本を離れて日本語が使えない海外で勉学するというのが絶対条件なのです。

ところが、昨年の初めからコロナウイルス（COVID19 - corona virus disease 2019）の蔓延の為、留学を希望する学生が海外へ赴く事が出来なくなりました。特にNZは世界最初に海外からの渡航者を遮断した国で、私どもの立場で言えば仕事そのものが無くなってしまったという事です。その為に多くの旅行会社はその存在を危惧するような状態になって来ました。私もワイカト大学へ日本人学生を送り出せなくなった状況下で日本事務所の存続を心配する思いでした。そのような中で事務所の若いスタッフは「ワイカト大学から日本の学生へのオンラインの英語研修を考えよう」と昨年早々から動き出しました。しかし日本には外国人の優秀な語学専門の先生方が沢山おられます。特に英語圏の先生が多い中で遠いNZの国からオンラインの授業を日本の大学や学生が受け入れるだろうか？と言うのが私の正直な思いでした。

一方、日本の多くの大学では、学生を海外の大学で語学留学させ、その海外大学の評価に基づい

て日本の大学が学生に単位を与えるというコースが存在しています。また在学中に海外の大学で学びたいと言う思いで入学してきた学生もいます。こういう状況下で日本事務所のスタッフは昨年初めコロナウイルスが蔓延を始めた直後からワイカト大学と日本の大学双方に働きかけオンラインの英語研修の成立を計って来たのです。その結果複数の大学とリモート英語研修の実施をすることができました。また、単独の大学ではなくリモート研修に日本の複数の大学が個人の学生として参加しその単位を認めるという仕組みも作ることができました。ワイカト大学に英語研修生を何年も（中には20年以上も）送り続けてきた日本の大学との信頼関係があったことと、ワイカト大学が日本事務所の提案に直ぐに反応してくれたことが大きな要因で有ったと思います。

その研修は数週間から数か月間、学生は自宅か母校でPCに向かってZOOMでの英語の授業を受けることになります。その為に学生にはその研修費用を支払うという負担が発生します（一部の大学は費用の一部を補助しています）。どう見てもそれは日本の大学でネイティブの先生の英語の授業を受けた方が費用的にも有利ではないかというのが私の印象でした。私は研修終了後参加した学生や各学生が所属する大学の不満が発生するのではないかと心配さへ覚えました。しかしそれは全くの杞憂でした。

ワイカト大学は参加した全学生からプログラム内容、ホームステイを含む学生の意見や満足度を調査しています。今回のオンライン研修に参加した学生たちにも調査票が出ましたが37名の学生からレポートがありました。その内容を下に示します。

（編集者注：紙幅の都合上、アンケート結果の詳細は割愛させて頂きました。ご希望の方には詳細をお送りします）。

私は、留学先を訪れていない学生全員が、Excellent(すごく良かった)又はGood(良かった)

の評価をしていることに心底驚き感動しました。又、学生の参加を進めてくれた日本の大学からも感謝の言葉を頂きました。先にも述べましたが日本にはネイティブの優秀な英語教師は数えきれないほどおられます。その先生方の授業とワイカト大学の授業はどう違うかを Uni. of Waikato College のトップに尋ねました。それによると、第二外国語としての英語教育の質の高さ、人間的温かさ、コミュニケーション能力など全てで高評価と資格を得ているワイカト大学の最高の教師をオンラインの教育に充てているとのこと。ワイカト大学はオンラインの授業を今後重要な柱になる事を見据えています。今回のオンライン研修に参加したのは神戸市内の大学（ワイカトとの関係は5年ほど）と名古屋市内の大学（ワイカトとの関係は20年以上）でした。不幸にして今後もNZへの渡航が出来ない状態が続いた場合、30大学以上ある関連大学にオンライン研修を提示していくことになる可能性があります。しかし学生がNZに渡航する通常の研修が出来る事を心から願っています。

追記：同大学出身のアーダーン首相はコミュニケーション学科で学位を取得されています。2008年の彼女の最初の選挙では労働党から出馬したのですが、ワイカト地方の選挙区では落選しました。しかし同選挙の比例区で初当選したそうです。2017年の選挙後、ニュージーランド・ファースト党との連携で首相になりました。赤ん坊の子供を連れて国会に出席するなど話題をよびましたが、現地ではごくあたりまえのこととみなしていました。ご存知の通り、今回のコロナ禍では世界できわめて早い段階で外国からの入国を遮断し、流行を抑えたことにより国民から絶大な信頼を得ています。特にワイカト地方の中心地、ハミルトンの市民は熱狂的な支持をしています。同市の老齢の人たちは、自分の子供や孫のように親密・信頼感を示しています。



(左:筆者 右:サイモン教授)

(ワイカト大学日本事務所顧問 松元昇)

■ 冬が近づくNZから

5月も終盤に差し掛かり、冬の始まりが近づいたニュージーランドからこんにちは、佐藤真弓です。2013年より、大阪からオークランドへ引越し、今は夫と幼い子供2人と生活しています。野菜や果物を生産し国内外に販売する会社に勤務し、日本へもパプリカ、トマト、冬野菜、イチゴ、柿などを輸出しています。今回は、オークランドの生活や、コロナ関連の状況をご報告します。

日本では、今シーズンのニュージーランド産のキウイフルーツが出回り、すでに召し上がっておられる方もいらっしゃると思います。ニュージーランドの農産物の中では圧倒的な輸出金額（2020年のキウイフルーツ輸出総額およそ1716億円）を誇るゼスプリのキウイフルーツ、今シーズンは記録的な収穫量となる見通しです。グリーンとゴールドに加え、新品種のレッドキウイは、数年前より日本へも出荷されていますので、お試しになった方もいらっしゃるかもしれません。このレッドキウイ、収穫時期が短いため、ニュージーランド国内でも手に入りにくい品種です。興味のある方は、見かけたらすぐに購入されることをお勧めします。切ったときの見た目が美しく、ベリー類のような甘酸っぱい味が特徴で、食後のデザートとして食卓に彩りをたしてくれそうです。



(美味しいNZのフルーツ)

そんなキウイフルーツなど食料品の買い物事情についてですが、わたしたしが住んでいるオークランドのスーパーでは、数年前からオンライン注文、自宅宅配のシステムがはじまり、今回のパンデミックを機に、サービスが加速しました。ロックダウン中、スーパーマーケットへの入店人数の制限があった際、高齢者、持病のある人、小さい子供がいる家庭など、生活必需品の買い物が難しい顧客にとってはとても便利なサービスでした。注文品の間違いや、賞味期限が間近のものが届けられたり、卵にヒビが入っていたり、ということはありませんが、返金にはすぐに対応してもらえるので、わたしたちは家まで届けてくれることの便利さを選び、利用しています。毎回顔馴染みのフレンドリーな配達員が来てくれるので、子供たちは配達のおじさんを楽しみに待っています。サービスは年々改善しており、オークランド以外の主要都市(僻地を除く)でも宅配を受けることができます。宅配以外にも、事前にオンラインで発注をしておき、指定時間に店舗にいくと、すぐに持ち帰れるように準備してもらえるサービスもあります。

コロナ対策に関しては、各国から賞賛を受けたニュージーランドですが、とはいえ太平洋の小国、ワクチン接種の進行はアメリカ、ヨーロッパの国々と比較すると遅れています。健康な65歳以下で、医療、通関検疫関連の職種についていない一般人は7月末から接種がスタートする予定です。

国境については、4月19日より、オーストラリア・ニュージーランド間の双方隔離期間無しでの渡航が可能になりました。しかし、オーストラリア

各地で発生した市内感染の影響で航空便の急な欠航、変更があるなど、まだ安心して旅行の計画を立てられるレベルではありません。

とはいいいながら、5月17日より、クック諸島へも隔離期間無しで渡航ができるようになるなど、少しずつ光は見えてきつつあるように感じます。一進一退しながらも、少しずつ前に進んでいるといった感覚です。

経済面は、程度の差はあれ他国同様、ほんの半年前にマイナス金利を予想していた経済評論家が、今はインフレ懸念による利上げを予見し、数か月先でも予想が難しい状況が続いています。

日本のニュースは日々目を通していますが、一体東京オリンピックがどうなるのだろうか、ニュージーランドからそわそわと見守っているところです。

もうしばらくストレスの多い日々が続くかもしれません、みなさまどうか健康第一で、電話、ビデオ通話、SNS、メールなどで、ご家族、ご友人のみなさまと頻りに近況を報告し合いながら、毎日少なくともひと笑い(できればもっと!)してお過ごしください。協会の例会が安心して開ける日が早く戻ってきますように祈っております。

(佐藤真弓)

■ NZの近況など

ご存知の方も大勢いらっしゃるかと思いますがNZはコロナのパンデミックの初期に国境を封鎖すると共にロックダウンを行った事でコロナ以前と同じ様な生活ができています。

海外からはNZ国民か永住者しか入国できず、入国者には自費での14日間の隔離施設滞在を義務付け、隔離施設の確保が出来なければ航空券の購入も出来ません。市中感染の発生に備え各お店にはQRコードのポスターが設置され来店者は政府の作成したアプリでQRコードをスキャンし各自の足取りを追える様になっています。また市中感

染が分かれば早期に感染経路を特定し予防を徹底する事で何度も感染拡大を防いできました。

現在はオーストラリア、クック諸島、ニウエとのトラベルバブル制度が運用され隔離措置なしで行き来が出来るようになりました。またワクチンの接種も国境管理者、医療従事者、高齢者や基礎疾患者、その他の4グループに分け国境管理者から優先してワクチン接種を進め、一般者についても7月以降からワクチン接種が始まる予定です。

コロナ以前と同じ様な生活が出来ていますが住宅価格や家賃の高騰、観光産業を中心としたホスピタリティ産業や留学業界へのダメージ、移民やワーホリ等の労働者の減少などの問題も生じています。中でも住宅価格は昨年と比べると国全体で20%近く上昇しており、マイホームの購入はコロナで一気に難しくなっているようです。

一方でニュージーランド国内にいる人にとっては国内観光するには最適な1年になったと言えるかもしれません。例年ですと観光客で賑わうテカポやミルフォードサウンドも観光客が少ない為周りを気にせずゆっくりと自分達の時間を過ごす事が出来ます。私達家族もこの1年間で Abel Tasman や Catlins Coast、Fiordland、West Coast 等をゆっくりと見て回る事が出来ました。

中でも普段なかなか行く事のできない West Coast の Westport から Kahurangi National Park にかけては雄大な大自然と厳しい環境下炭鉱で働いていた人々の歴史を感じる事が出来る場所でした。Denniston にあった炭鉱は1800年代後半から約100年にわたって栄え、当時は1500人近くの人が生活していました。海拔600mの急斜面にある炭鉱から1.7kmのインクラインが500m下へ石炭を運んでいたそうです。厳しい気候のうえ辺境に有る為、当時の生活はとても厳しかったそうです。現在は炭鉱跡と当時と同じ高原からのタスマン海の景色を眺める事が出来ます。



(Denniston 炭鉱跡地)

そして Kahurangi National Park には【Lost World】とも呼ばれる Oparara Basin があります。川は森の木々から作り出されるタンニンでオレンジ色や茶色、黒色に変化していて水面はまるで鏡の様でした。そして約3500万年前に堆積した石灰岩層は川に浸食され壮大なアーチを形成しています。



(Lost World)

ニュージーランドと日本の往来が再開されるのはまだしばらく先の事かと思えます。まだまだ知らないニュージーランドが沢山有るようなのでコロナが収まるまでニュージーランドの魅力を再度見つめ直してみようと思っています。コロナの一日でも早い終息とニュージーランド協会の皆様のご健康をお祈り申し上げます。

(片波見徳将)

■ コロナ禍と古稀の手習い

2019年12月に武漢で発生したと言われている新型コロナウイルスは今年の5月でその発生からほぼ1年半となります。当初ダイヤモンド・プリンセス号での感染のニュースを聞いたときは、

どこか他人事のように感じていました。それから、長引く自粛生活の中で多くの人たちが疲弊しています。私も当初戸惑いがありましたが、ステイホームに徐々に慣れてきて、今はwithコロナで頑張っています。

今回はそんなwithコロナな日々の中で私がはまっている事を三つご紹介したいと思います。

一つはYouTubeを通じてテレビ画面で動画検索することです。最近では便利で、音声で検索ができます。例えば「ニュージーランドのクライストチャーチ」と音声で指示すれば、クライストチャーチの観光案内、現在の日常などが紹介されます。追憶の橋、リバーサイド・マーケット、南極センター、植物園、紙の大聖堂等…そこにはかつての美しい景色はそのままに、観光客がいなくなった、別世界が映し出されます。ニュージーランドはいち早くロックダウンをして、感染拡大の抑え込みに成功しています。海外からの観光客の受け入れは数年先になるだろうとの地元の説明がありました。私が5年前に訪れたときは沢山の海外からの観光客でにぎわっていましたが、YouTubeでクライストチャーチの現在を見ていると、そこには海外からの観光客の姿はほとんどなく、人々の暮らしにはほのぼのとした雰囲気が漂っています。フードコートは地元の人々で賑わっており、マスク姿の人はほとんど見当たりません。エイボン川の川べりで子供の遊ぶ声、風の音、小鳥のさえずりがはっきりと聞こえます。これがクライストチャーチ本来の姿なのかもしれません。観光客がいないからこそ映し出されるクライストチャーチの本来の姿。皮肉なことに、そこに観光客である私達は行くことができません。しかし、この美しい風景をTVで見ていると時間がたつのを忘れず。

二つ目は、オンライン学習(英会話)です。60歳の手習いと聞いたことがあります。私にとっては古希の手習いです。よく、何のために英会話の勉強をするのと聞かれます。外国の人と話すためや海外旅行での便利さのためだけではなく、私の

場合は「ボケ防止」のためです。しかし、現状は覚える量より忘れる量が多い様で困っています。このままでいくと遅かれ早かれ認知症になりかねないので頑張ります。オンライン英会話学習についてもう少し説明します。私のオンライン・スクールの講師はほとんど日本人です。講師が住んでいる場所は多くは日本国内ですが、アメリカ本土、イギリス、オーストラリア、ハワイ、台湾、グアム等、海外の在住の方もいます。レッスン料は講師のレベルによって若干の差がありますが、1レッスン25分単位でだいたい700円~1,000円程度です。私がレッスンを受けているハワイ在住の先生の場合、最初の挨拶(フリートーク)でハワイのタイムリーな現状を知ることができます。今、ワイキキビーチはアメリカ本土からの観光客でにぎわっているそうです。先日のレッスンでも、昨日のハワイのコロナ患者は70人だった、ワクチン接種者は30%に達しているなどという興味深い話も聞くことができました。また、アメリカではワクチンパスポートの導入も検討されているそうです。

三つ目は家庭菜園です。家から歩いて15分程のところには菜園があります。私には持病があり無理はできませんが、天気が良くて、体調が良い日は1~2時間ぐらい作業をします。春である今は夏野菜のための作業をします。除草、耕耘、土作りとハードな仕事になりますが、キュウリ、ナスビ、トマトなどを収穫できると楽しくなります。自給自足とまではいきませんが、我が家の食卓にはかなり貢献できているはず。特に作業後に枝で熟したトマトをもぎり、そのまま食べる時に幸せを感じます。





土は無口です、土は怒りもしなければ愚痴も言いません

土は正直です、育った作物で答えを出します。

以上、ステイホームを楽しく過ごすための、私のはまっている三つの方法を紹介しました。

当会報2021年3月号で次の様なニュージーランド警察のツイッターの文章が紹介されていました。

「First time in history, we can save the human race by lying in front of the T.V and doing nothing. Let not screw this up」

私もまったくの同感です。日本で年金受給者は全人口の40%程度です。私もその一人ですが、我々年金受給者の大半は、贅沢をしなければ仕事をしなくても日々暮らして行くことができるのですから、状況が許すならば自粛生活、ステイホームに徹するべきだと思います。とある政治家が「最悪のケースで65歳以上のワクチン接種完了は年内、それ以外の国民は来年春ぐらいの完了予定」とアナウンスしたそうです。少なくとも私(我々老人)にとっては自粛生活を徹底することが最大の感染予防であると考えています。元アメリカ合衆国大統領ケネディが次のような有名なスピーチをしています。

「Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country」

私達が住んでいる関西ではすでに医療崩壊の真ただ中です。もはや政治が何をしてくれるのかを待つだけではなく、我々が自らいかにコロナ禍を乗り切るのかを見つけなければならないと思いま

す。私も98歳の母の介護(老ろう介護)とコロナとの戦いで厳しい状況ではありますが、出口のないトンネルはないことを信じて頑張るつもりです。

(北野和夫)

■ Do you know him?

先日、テレビでハリスさんのことを初めて知りメールと電話で直接連絡を取りました。ご承知の方もおられるかと思いますが、ご紹介します。



マイク・ハリス(Michael Harris)さんは、1973年NZのダニーデン生まれ。現在は群馬県「みなかみ町」在住。オタゴ大学で日本語と会計学を学び、在学中に一度来日されました。卒業後再来日、長野県の白馬スキー場で働いていた1995年の春にNZ出身の知人の紹介で旧水上町を訪れました。「春の雪解けの利根川はワールドクラス、この資源は必ずラフティングの名所になる。」と確信されました。水上の地元のアウト・ドアー企業で働いた後、知人と共にラフティング会社(株式会社キャニオンズ)を2002年に設立されました。



(利根川のラフティング)

その後スキー・キャニオニング等様々なアウト・

ドアスポーツの体験プログラムを提供の他、宿泊施設・カフェも経営されています。60歳以上を対象にしたプログラムもあるようです。キャニオンの YouTube をご覧になればニュージーランドスタイル?の活動の様子が良く分ります。

「みなかみ」は知る人ぞ知るラフティングの世界的なメッカの一つになりましたが、ハリスさんの貢献度が大きいようです。

ハリスさんは地元との関係を大切にし、自然環境保全について行政も含めた意見交換の場を設けたりしておられます。持続可能な「みなかみ」の発展に貢献したいとの熱意を持っておられます。日本人の奥様と2男、1女の5人家族です。人口2.2万人の同町には年間5千人ほどの外国人が訪れていましたが、コロナ禍の影響で激減し、現在は関東圏の人々が主になっています。

以前は、東南アジアのインターナショナル・スクールから参加者が多くいたそうで多国籍のスタッフが対応していました。関西人には群馬県は馴染があまりないですが、上越新幹線で東京から2時間弱で行けるそうです。尾瀬にも40キロ程度でそう遠くないようですからコロナ禍が収束すれば訪れたいと思います。

(株)キャニオンズ HP : <http://www.canyons.jp>

(石井久行)

■ 50周年記念マグカップ

昨年の創立50周年を記念して製作したマグカップは、在庫が少なくなりました。

ご希望の方には、郵送・手渡しなどで配布いたします。電子レンジ専用です。1個1000円・送料400円です。ご希望の方は事務局にご連絡ください。



■ ブラックカラントソーダー

ご承知の通り、北海道の恵庭市はNZ南島のティマル市と姉妹都市です。札幌市の南に隣接し水・緑・花を基調とした街づくりをしており、温泉・ゴルフ場もあります。交流事業として、人的交流活動(文化と英語研修に意欲ある青少年対象)の他、マヌカハニー・ジャム・ワインなどの特産品を輸入・販売しています。両市の更なる経済交流の促進を目的に商工会議所が中心になり、このたびブラックカラント(カシス)ソーダーが完成しました。恵庭産のビートとティマル産のブラックベリーが主材料です。ウイスキーや焼酎、白ワインと割っても美味しく微妙な酸味と甘みのバランスを楽しめます。恵庭ニュージーランド協会様からサンプル24本をお送りいただきましたが、コロナウイルス禍と数量の関係で試飲会を開催できません。現在は、道の駅「花ロードえにわ」・市内のセイコーマート等とネットショップ「えにわ特産品市場」にて1本(340ml)税込248円で購入できます。関西では入手できないので北海道旅行で現地購入されてはどうでしょうか。年内に例会が開催できれば試飲できるように事務局で保管しておきます。

■ Aotearoa やさしさの循環する国で ～第5回～

「家事の流儀」

食器を洗う時、洗い桶に水と洗剤を入れて洗いますか?それとも洗剤を直接スポンジにつけて洗う?あるいは自然素材のたわしでこするだけ、または食洗機しか使わない? NZの食器の液体洗剤は濃縮タイプなので、水で薄めて使う。まず、シンクにお湯を1/3ほどため、洗剤を投入。さらに勢いよく湯を足して、洗車でもするかのようにブクブクと泡が立つまでかき混ぜたら準備完了だ。汚れた食器を入れて浸し、長い柄のついたブラシ、

なければ厚手のふきんのようなものでゴシゴシ洗う。泡の湯は60度ぐらいと相当熱いので、ゴム手袋が欠かせない。洗う順番は、直に口をつけるものから。最初はきれいに仕上げたいグラス類、そしてカトラリー、お皿、鍋類が続く。湯はあつという間にどんどん濁る。これ以上は汚れが落ちないというほど湯が汚れば、栓を抜き、またお湯をためて作業続行、ということになる。

問題はここからだ。海外の人と家事をシェアした経験のある人はピンとくるだろう。日本ではふつうの「流水でのすすぎ」の工程がないのだ。シンクの濁った湯の中から手探りで食器をつかみ出したら、泡だらけのまま水切りかごに並べていく。そして泡ごとふきんで拭き取ったら、おしまい。あるいは泡つきのまま自然乾燥させる。日本人なら、せめて泡だけでも落としたい、と思うだろう。しかも、こちらの洗剤はげばげばしい黄色か緑に着色されているのが主流で、あれが口に入ったら、と思うとゾッとする。「なぜ流さないの？」と聞いて、「なぜ流すの？」と聞き返されたこともある。Clean Green（手つかずの緑に囲まれた環境、と言ったような意味で使われる）の国の住人が、こんなにも無頓着なことはカルチャーショックだった。「台所流し」は英語では sink（写真①）だ。シンクには沈む、という意味がある。日本は水で洗い流すから「流し」だが、シンクの国では食器を沈ませる（浸す）からかな？と自分を納得させてはみるが、移住30年近くになっても、皿洗いは日本風のすすぎ洗いを固守している。



① 食事に使った紙ナフキンなどで、さっと汚れを拭いてからシンクへ。こうやって熱い湯に数分つけおきしてから洗う。

そういえば昔、神戸の実家で預かった留学生に「お宅の食器洗いの流儀は？」と聞かれて戸惑ったことがある。なぜそんなことを聞くのかわからなかったし、世界にいろいろなお皿の洗い方がある、なんて思ったこともなかった。その後、中南米やヨーロッパなどにも住む機会があったが、食器洗いのやり方はたいてい日本と違っていた。「節水」「硬水なので、最後にすすぐとミネラル分が付着し水垢がつく」「水が安全でないから、殺菌効果のある洗剤の泡がついている方が安心」など、理由はそれぞれだった。彼らにとっては押し並べて、泡の有無よりも節水や見た目の方が優先順位は高いらしい。それ以来、台所を手伝う時には、必ず家の人に「流儀」を聞くようにしている。

『泡であらう風呂と緑の中のスパ』

すすがないのは食器だけではない。身体を洗った後も、泡を洗い流さないことがしばしば。そもそもお風呂に入ること自体とても稀で、どこの家もバスタブの底にはホコリがたまり気味だ。逆に、「日本人は毎日風呂に入る」というとびっくりされる。「身体中のアブラが抜けちゃうんじゃない（笑）」と言われたこともある。

日本のお風呂は、浴槽と別に洗い場があるのがふつうだが、NZではバスタブだけ、シャワールームだけというのが一般的だ。お風呂に入る時は、泡の立つボディークリームを湯の注ぎ口近くに入れ、その水圧を使って泡立たせながら湯をためる。湯の表面を泡が覆いつくしたら身体を浸す。バスタブ内で体を洗ったら、ここでもすすがず、そのままバスタオルで拭くか、泡つきのままバスローブを羽織ってバスタイムは終了する。追い焚き機能はないし、どんどんお湯は冷めるので、長風呂はしたくてもできない。

その代わりに、屋外にスパ/ジャグジー（写真②）のある家は多い。これはハイドロセラピーなどの保養とリラックスが目的だ。3人用くらいか

ら7人以上入れるような大きなものもあり、家族だけでなく友人を招いて自然の中でジェットバスなどを楽しむ。照明や Blue Tooth などの機能もついており、雰囲気演出したり音楽も楽しめる。ポカポカ、ぶくぶくの中で一杯、という人もいれば、うたた寝する人も。だが、設定できる温度は最高40度。冬場は外気との差でスパから出るのをためらうほどで、のぼせるほど熱いお風呂は夢のまた夢だ。



② わが家の屋外スパ。夫が電気の配線以外のすべて(土台づくりから設置まで)の工事をすべてひとりで行った。木の葉や枝などが入らぬよう屋根は必須。このサイズで5人用。

「色あせる洗濯物と乾燥機」

NZの洗剤は主成分が界面活性剤で、きつい香料もたっぷり。蛍光増白剤が添加されているものも多い。強い紫外線に加え、増白剤まで入っているとすれば、色物衣類はあっという間に退色する。濃い色がいちばん危ない。天気の良い日にシーツを屋外に干す場合は、タイマーをかけて取り込むぐらいにしないと、数時間で物干しラインがくっきりとつく。洗濯物が外に出ている日中に、雨が降ったらどうだろう。日本なら天気予報を気にして濡らさない工夫をするところだが、キウィは気にしない。「また晴れたら乾くから」「天気は変わりやすいから、いちいち気にしない」と干しっぱなし。あるいは、濡れても「まとめて大型乾燥機で乾かすので大丈夫」と口をそろえる。気にしない、で連想するのが傘の出番の少なさだ。日本な

ら、予報が雨なら少なくとも折り畳み傘くらい持って出るだろう。ここでは違う。傘を持ち歩くどころか、実際に使用している人も滅多に見ない。どこへ行くにも車だから、というのもあるだろう。この国で、歩く姿を見かけるのは学生ばかりだ。ずぶ濡れになったスニーカーを脱いで手に持ち、髪からしずくを滴らせ、濡れネズミよろしく重いカバンを背負って歩く制服姿をしょっちゅう見かける。初めて見た時はさぞかし冷たいだろうに…と同情したが、持っていないのではなく、使わないのだと分かって気にならなくなった。

「巨大な物干し」

洗濯物干しの形もユニークだ。強風でひっくり返った傘のようなフォームをしていて、裏庭の地面に突き刺さるように立っている。Clothes Line (写真③) と呼ばれ、高さ約2メートルとかなり大きい。傘の骨のように何重にも張り巡らされたラインは全長50メートルを超えるので、干すスペースは十分だが場所もとる。固定してあるのは軸部分だけで、傘部分は洗濯物が干しやすいようにカラカラと回る。洗濯バサミも必須アイテムだが、決して外の物干しに残したままにはしてはいけない。強い太陽光線で、いとも簡単にプラスチックが劣化しボロボロになるからだ。洗濯機はフロントローダー(前に開口部があるもの)とトップローダー(上部に開口部があるもの)の両方が人気を二分する。置くスペースには困らないから、乾燥機は別々、がふつうだ。NZでも6月は長雨が続く。乾燥機は便利だが、電気代も馬鹿にならない。そういう時はやはり室内干しをするらしい。日本でも見かけるようなラック(Clothes Rack という)が売り場に並んでいる。



③ NZ の物干し竿。Clothes Line と呼ばれる。

わたしが住んだ北ヨーロッパでは、洗濯物を屋外で干す人は圧倒的に少なかった。洗濯が終われば、そのままタイマー付きのドライヤーに放り込むだけ。中南米では、庭の芝生や生垣、あるいは屋根の上に広げて置いて乾かした。余談だが、グアテマラやエルサルバドルでは手で絞り、強い太陽で乾かしてシワシワになった衣服も、仕上げには必ずピシッとアイロンがあたっていた。たとえどんなに貧しくても、それが彼らのお洒落のエスプリだった。アイロンは霧吹き機能などない。衣服がまだ湿っているうちにかけるか、乾いてしまったら手で水をうち、くるくると巻いて全体を湿らせてからかける。そもそも洗濯機がなくて、屋外のコンクリート流しを洗濯板代わりに豚の油脂から作った黒い石鹼をつけ、手でゴシゴシと洗濯をしたのも懐かしい思い出だ。

「洗剤事情」

近年ようやくスーパーにも、蛍光増白材や界面活性剤の入っていない種類が並ぶようになった。無香料の洗剤はまだまだ少なく、どれも日本の2倍の値段がする。粉洗剤2キロで8-10ドル(600から800円ぐらい)で、液体洗剤で1ℓが約10ドル。柔軟剤も1ℓが8ドル(600円)ほど、と高めだ。*1ドル=80円で計算

数年前、できるだけパッケージを排除し、商品を量り売りするなど環境に配慮した BIN INN という店で、Washing Soda (炭酸ナトリウム、ソーダ灰)を見つけた。市販洗剤の数分の1の値段で、

セスキソーダよりもさらに強力、汚れが面白いように落ちる。無臭なのもありがたく、溶かして予洗や掃除にも使っている。アルカリ度が非常に高いので、取り扱い時にはビニール手袋が必須だ。手もぬるぬるになる。使用後はクエン酸を少し垂らして中和すると、布地が固くなるのを防げる。店のおじさんは「よく売れるよ」と言って大きな樽(写真④)を指さした。



④ Washing Soda の入った黒い樽(右下)。1キロで3.6ドルの安さだ。結晶状でとても湿気を吸いやすい。

「志は高く、エシカルにビジネス」

合成の強い香りが苦手で、住み初めて以来30年近く「ecostore」製品(写真⑤)を愛用している。日本の Cosme Kitchen などでも取り扱いがあるので、NZ 発のエコ製品としてご存知の方もおられるだろう。私たちの住むノースランド地方でスタートしたブランドで、最初はメールカタログ販売のみの小さなビジネスだった。カタログは数ページしかなく、そうじ用洗剤、ベビー用製品、オーガニックのガーデニング製品が数点載っているだけだった。生まれた時からこの製品を使っている娘は、大きくなってからも微香性のシャンプーとコンディショナー、歯磨き粉などを愛用している。容器デザインはたびたびリニューアルされ、ボトルの容量が小さくなったりもしたが、有害なケミカルを一切不使用(もちろん無香料)という

姿勢は変わらない。ブランドの創設者 Malcom Rands は 1986年に NZ 初の permaculture eco-village (自然のエコシステムを参考にし、持続可能な建築や自己維持型の農業システムを取り入れ、社会や暮らしを変化させる総合的なデザイン科学概念 (wikipedia より) を立ち上げたことで知られる。10年ほど前からはオーストラリアとニュージーランドの主要なスーパーマーケットの棚にも並ぶように。エシカル (道徳観のある) ビジネスが、ビッグビジネスに台頭できることを証明した。



⑤ Ecostore の敏感肌用のラインナップ。ボトル' デザインもシンプルでかわいい。

「4時間回る洗濯機」

1959年、オークランドのハーバーブリッジが完成した年に消費者の啓蒙を目指して設立された Consumer Council (のちに Consumers Institute に改称) という団体がある。この団体が、広告を一切載せない Consumer. という雑誌(写真⑥)を発行している。収入源は会員の購読料のみ。応援の意味も込めて、筆者も数十年来の読者だ。目玉は日本の「暮らしの手帖」がやっていたような公正な商品テスト。最新の洗濯機テスト結果 (今年3月) によれば、ヨーロッパでは不動の地位を誇るドイツのブランド Miele を抜いて、韓国の LG が首位に躍り出た。LG は NZ では洗濯機のほかにも、冷蔵庫などの製品テストで安定してトッ

プの座を占める信頼のブランドだ。中国のブランド Haier に比べると、その高評価は安定している。



⑥ 60年の歴史を持つ消費者運動の旗頭だ。A4版の月刊誌「Consumer.」は TIME 誌と同じ体裁。

洗濯機を買って驚いたのは、その洗浄時間の長さだ。人気機種でも1時間半を超えるのは当たり前。省エネの最短サイクルでさえ1時間。長いものになると4時間という信じられないほどの長い時間、洗濯機が回り続けている。日本と違い、NZでは洗濯は週1、2回がふつうなので、かかる時間は同じ、ということなのかもしれない。韓国パワーに押されつつも、日進月歩でテクノロジーが進化する日本で、4時間運転の洗濯機を購入する人がいるとは思えない。時短が目的になって、あくせく生きることはごめんだが、日本のドラム式洗濯機のように、スイッチを押すだけで乾燥して「すぐに着られる状態」で衣類が出てくれば、大幅な家事の負担の軽減だろう。運転時間最短30分というのが、ちょっと羨ましい気もする。

(さかい ケイツ みか WHANGAREI 在住)

■ お悔み

オームドセン・大田・昭子さん (1930年生まれ) の訃報が呉橋前会長から届きました。

オームドセンさんは1953年、ニュージーランドに嫁がれました。その後、生涯にわたり両国の交流に貢献され勲五等瑞宝章を受章。当協会では、2010年にご講演いただきました。オームドセンさんと親しかった呉橋さんと永田さんのお二人から寄稿を頂きました。ご遺族に対し当協会より心よりのお悔みを申し上げます。

「昭子さんご逝去」

2021年5月19日（水） ウェリントン在住のオームドセン・大田・昭子（おおた あきこ）さんが永眠されました。

享年90歳。ウェリントン病院でご家族にみとられながら安らかにとドミニオンポスト紙訃報にありました。葬儀は5月26日（水）お住まいのカンダラ地区の長老派教会で行われました。

コロナ禍、日本から渡航できなかったご遺族のためもあってか、葬儀はライブ中継されました。冒頭、牧師は「彼女は Peace Maker」であったと述べました。まさに彼女に贈るにふさわしい言葉と感動しました。

昭子さんはNZ 協会（関西）第221回例会（2010年6月6日）に於いて 1時間強の講演「私の日本、私のNZ」を行いました。協会ホームページ/行事報告で全文を読むことができます。下記よりジャンプすることもできます。

http://nzsocietykansai.com/EventReport/221th_Akiko_FullScript.html

事務局長だった故桑原耕治さんが録音テープから起こした労作です。日本とNZの友好の歴史に70年近く貢献した昭子さんの貴重な記録です。ぜひご覧ください。

父、大田實海軍中将の沖縄戦での自決（最後の電文はレガシーです）、呉市でリアルタイムで経験した広島への原爆投下、15歳の彼女が焼け跡で食べ物を求めて出会ったNZ人女性、1953年、23歳でNZ軍人と結婚、NZのBullsでの敵国女性としての生活。彼女の両国友好交流への情熱は強烈な戦争体験と二度と戦争をしてはならないという強い信念に基づいていました。まさに Peace Makerの生涯でした。

初めて昭子さんに会ったのは1992年、彼女は夫君エリックさんと共に1994年ウェリントン日本祭の実行委員会のメンバーでした。爾来30年近い交友の思い出は尽きません。ご自宅での

お茶やホームステイに招かれ時間を忘れて語り合ったこと。大阪から金沢、秋田（金浦）の二人旅。フェザーストン事件の遺族のNZ訪問を連絡すると、瞬く間にフェザーストン市長や議員との昼食を手配してくれたこと。漫画「この世界の片隅で」を届けたところ、朝まで何度も読んで涙にくれましたと電話があったことなど。

1994/1996/2001ウェリントン日本祭、1997白瀬南極探検隊ウェリントン寄港記念碑序幕、2009年かつぼれ気楽座公演、2017年習志野高校吹奏楽 NZ 演奏ツアーは彼女なしでは成功しなかったでしょう。

日本ニュージーランド協会（関西）、白瀬南極探検隊記念館、習志野高校吹奏楽、1000人の日本からのウェリントン日本祭参加者、指揮者・守山俊吾、永田美夜子、呉橋真人の連名でお花を贈りお悔やみしました。

昭子さん安らかにおやすみください。あなたを忘れることはありません。



（左：大田さん 右：筆者 96年日本海にて）

（呉橋真人）

「昭子さん、また会える日まで」

初めて昭子さんにお会いしたのは、ウェリントン日本祭実行委員会の会議に出席した1993年でした。

それ以来、何度昭子さん宅のキッチンテーブルで日本祭や習志野高校吹奏楽部演奏会の打ち合わせをしたことでしょうか。即断即実行の昭子さんはその場で電話をかけまくり、交渉をし、人脈の広

.....

さとその人望でどれだけ助けて頂いたことか。そういえば電話がかかってくる立場になった事もありました。東日本大震災後の計画停電で、東京の道場が使えなくなったハット市剣道クラブへのヘルプ要請でした。きっと昭子さんはこうやっていつも誰かを助けていたのだと思います。

打ち合わせが一段落すると、チーズやサラダをパパパと用意し、大好きなシャルドネワインを飲みながらいろいろなお話をして下さいました。お父様のこと、戦後の苦勞、国際結婚に反対されたこと、情熱を注いだ日本文化センターや日本協会のこと。この辺りは昭子さん講演会の記録をぜひ読んで頂きたいと思います。

昭子さん宅のテレビは日本の衛星放送を視聴することが出来ました。「永田さん、私楽しみにしている番組があるの。可愛い坊やが沢山出るのよ」。キッチンから居間へグラス片手に移動し、始まったのは若手ジャニーズ番組でした。可愛い坊や…昭子さんの気持ちの若さに驚くと共に、彼女がいくつになってもパワフルなのはこういうところなんだらうなと感心しました。見習えていませんが。

ラグビーの大ファンでもありました。たまたまオールブラックス戦がある時ウエリントン滞在中だった私は、「一緒にテレビ観戦して応援しましょうよ！」と電話を受け、いそいそともはや慣れ親しんだ路線バスに乗って昭子さん宅に駆け付けました。観戦のお供はもちろんシャルドネワインです。フムス（イスラエルの豆ディップ）がワインと合って美味しかったと言ったとたん「買いに行きましょう！」とあっという間にスーパーへ。オールブラックス勝利の美酒は更にすすみ、私はそのままお泊りすることになりました。いやいや。このエピソードは全て御年87歳の昭子さんです。あれからわずか4年で逝ってしまわれるとは。

もうあのバスに乗って昭子さん宅へ伺うことはないのだと思うと寂しさが一層つのります。人は声の記憶から忘れていくといいますが、私には今でも昭子さんのはつらつとした声をはっきりと聞

こえます。

昭子さん、どうぞ安らかに。また一緒にシャルドネワインを飲みながらいろいろなお話を聞かせて下さいね。

(永田美夜子)

■ 日本ニュージーランド学会

第28回研究大会のご案内

「COVID-19とニュージーランド」

～政治文化、地域レジリエンス、社会保障の視点から日本が学べること～

日本NZ協会理事の片山愛一氏から上記のご案内をいただきました。オンラインの公開シンポジウム形式（無料）で開催されます。

- ・報告1. 「コロナ危機への対応に見るNZの政治文化」
オタゴ大学 将基面貴己教授
- 2. 「コロナ禍のNZの市民社会と地域レジリエンス」
龍谷大学 石原凌河准教授
- 3. 「NZの社会保障制度とコロナ危機」
東北公益文科大学 武田真理子教授
- ・ディスカッション
「COVID-19とNZ～日本社会への示唆～」

開催時間帯：6月19日（土）13時～15時半

申し込み締め切り：6月17日12時まで

申し込み方法：下記内容のメールをお送り下さい。

宛先：sawabe@koeki-u.ac.jp

(日本NZ学会事務局 澤邊氏)

件名：日本ニュージーランド学会

公開シンポジウム申込み

内容：① 氏名 ② 所属

③ メールアドレス (ZOOM ID 送付先)

④ 電話番号

■詳細は、日本NZ協会HP <http://nzsj.tokyo> をご参照下さい。